



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	あとがき
Author(s)	清水, 誠
Citation	独語独文学研究年報, 31, 342
Issue Date	2004-12
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/26180">https://hdl.handle.net/2115/26180</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	31_P342.pdf



## あとがき

植木迪子先生のご退官を記念する本号には、会員以外からも広く執筆のご希望をいただきました。長年にわたる先生のご恩にいささかでも報いることができれば幸いです。

植木先生は幼少の頃から、北大のキャンパスをご自宅の庭のようにしてお育ちになりました。本学独文科をご卒業後、助手を勤められ、5年間の広島大学文学部独語学講座（当時）への赴任期間を除きますと、1980年4月に本学文学部独語学講座（当時）に着任されて以来、一貫して本学の発展に尽くされました。その間、ドイツ学術交流会（DAAD）ならびにフンボルト財団の奨学金制度等でドイツに留学されています。1990年に東京で開催されたドイツ語学文学国際学会（IVG）にさいしては、同学会の副会長をお務めになりました。また、1996年4月から1年間、ベルリン自由大学東亜研究所に客員教授としてご滞在になり、海外のゲルマニストとも広範な知己の輪を広げられ、本学のゲルマニスティクの内外における評価を格段に高められました。

このような華々しいご経歴にもかかわらず、先生は権威主義や自尊心とはまったく無縁で、他人の気持ちと調和を大切にされ、周囲の厚い信頼を集めてこられました。この数年は学内の要職を歴任されることになりましたが、ご自身の研究教育の障害としか言えないような用務に私情を交えない強い責任感で一貫して対処されたのは、本学にたいする深い愛着と女性教員としての先駆的役割を理解されたためかとも推察されます。これから社会に出る本学の女子学生にとっても、植木先生は模範と言えるでしょう。

先生はまた、本学の外国人教師を長らく勤められた故ヘルマン・ヘッカー先生にお孫さんのように育てられ、最初の言葉がドイツ語の Baum! だったというのは有名な逸話です。ドイツ語に母語のように自然に親しまれた先生の語学力にたいして、当初、私は特別な思いを抱いていませんでした。ところが、ある日、先生の研究室の机の上に置かれた独和辞典の小口を見て、自分の無理解を知らされました。それはおよそ女人の手についているとはにわかには想像しがたいほどの手垢にまみれて、黒々と光っていたのです。

言語学以外にも文学、哲学、美術工芸にも深い理解をお持ちの先生が今後、公務を解かれ、十分にご自身の時間をお持ちになり、跡を継ぐ若輩たちに向けてドイツ語研究と異文化理解のためのさらなる啓発的な教えを世に問われることを願ってやみません。植木先生の今後のいっそうのご健勝をお祈りいたします

2004年 8月

清水 誠（北海道大学大学院文学研究科教授）